〈前置き／書名・著者名〉◆見出しは読まず、ここで間をとる。

私の「この一冊」は、恩田陸の『夜のピクニック』という小説です。私は本を読むのが好きという訳ではありませんが、この本は夢中になって読むことができました。みんなにもぜひ読んでもらいたいと思ったので、この本の魅力について発表します。よろしくお願いします。

〈出会ったいきさつ〉

四月の新入生向けの図書室利用ガイダンスの時、図書室の入り口付近に上級生による「推し本コーナー」があって、そこにこの本があったんです。

本のタイトル、「夜」と「ピクニック」の結びつきに「え？　どういうこと？」と不思議に思って、どんな本なんだろうと興味を持ちました。表紙には夜空に浮かぶ銀河を背景に二人の男女が白抜きで描かれていて、それが謎めいていて余計に手に取って見たくなりました（◆ここで本の表紙を見せる）。

司書の方から、このガイダンスをきっかけにぜひ本を借りてみてくださいと勧めがあったので、迷わずこの本を借りてみました。けっこう分厚い本だけどゴールデン・ウィークを利用して読めば読めるんではないかとも思いました。

〈あら筋・内容〉

「夜のピクニック」というのは、北高の伝統行事「北高鍛錬歩行祭」のことで、全校生徒約一二〇〇人が朝の八時から翌朝の八時まで八〇キロメートルの道のりを歩きます。主人公は二人いて、西脇融と甲田貴子。ともに高三で、実はこの二人異母きょうだいという複雑な関係にあります。二人はそれをひたすら隠し続け、互いに近づくことを避けてきましたが、高三になって同じクラスになってしまいます。そして最後の歩行祭を迎え、貴子はある賭けを抱いて臨みます。融との関係がもたらす葛藤を乗り越え、新たな関係を結ぼうと考えたのでした。

『夜のピクニック』はこうした血をめぐる葛藤に加え、貴子の親友、美和子や杏奈、融の親友、忍が登場し、高校生の友情や恋愛を描いた青春物語ということができます。

〈読後感〉
融の親友、戸田忍が融に向かってこんな話をします。
小学校の先生になった従兄弟がよくお勧めの本を持ってきてくれたが、自分はほとんど読まなかった。最近になって退屈しのぎにそのうちの一冊『ナルニア国ものがたり』を読んだ。読み終わったとき、忍は「しまった。タイミングを外した」という感想を持ったと言います。その箇所を読んでみます（◆読むページに付箋を貼っておく）。

「……最後まで読み終わった時に俺がどう思ったかというと、とにかく頭に浮かんだのは『しまった！』っていう言葉だったんだ」「しまった？」
「うん。『しまった、タイミングを外した』だよ。なんでこの本をもっと昔、小学校の時に読んでおかなかったんだろうって、ものすごく後悔した。せめて中学生でもいい。十代の入口で読んでおくべきだった。そうすればきっと、この本は絶対に大事な本になって、今の自分を作るための何かになってたはずだったんだ。そう考えたら悔しくてたまらなくなった」

この話は雑音をシャットアウトして生きる融の狭いストイック性を批判したものです。「雑音だって、お前を作ってる」、だから「雑音はうるさいけど聞いておかなきゃなんない時だってある」、このままだと後悔する日がきっとくるだろうと忍は言い、「雑音」を単なる「ノイズ」と片付けないことの重要性を融に説きます。
この本を通して、友達関係、恋愛、さらには学校行事など、さまざまな「雑音」が自分を作っている重要性に気づくことができました。私にとって「この一冊」とめぐりあったことは「タイミングを外さなかった」ということになります。

〈この本の魅力〉
この本の魅力を、私はミステリーというスパイスがきいた青春小説だと捉えています。

第一の魅力は「ミステリー」、つまり推理小説仕立てです。そもそも作者の恩田陸はミステリー作家だそうです。この小説でも貴子の親友でアメリカに転校した榊杏奈の手紙にある「去年、おまじないを掛けといた。貴子たちの悩みが解決して、無事ゴールできるようにN．Y．から祈ってます」という一節の「おまじない」の謎が小説の最後で解かれます。第二は「青春小説」です。歩行祭について融は「今、いろいろなものの境界線にいるような気がした。大人と子供、日常と非日常、現実と虚構、歩行祭は、そういう境界線の上を落ちないように歩いていく行事だ」と言っています。この行事の特異な時間に交わされる親友との真剣なやりとりの中で、例えば融は母を一人の女性として捉えたり、軽蔑していた父に「つらかっただろうな」と許しにも似た感慨を抱いたりすることができるようになりました。青春とはまさに融のいう「境界線」という季節だと思います。この小説は、私たちがこれから迎える大切な境界線の時期に大きな示唆を与えてくれるような気がします。ぜひ、みんなにも読んでほしいと思います。これで発表を終わります。